

フランス語の綴り字改革

—— 現代フランス語の基礎を築いた17世紀から19世紀にかけての綴り字改革 ——

二 瓶 恵

現代フランス語の礎は17世紀に築かれたといわれている。いわゆる近代フランス語がその骨格を固めたとされる時代である。14世紀を迎える頃にはフランス語は既にラテン語から分岐した独自の特徴を持った歴とした独立した言語であると認識されていたと云われているが⁽¹⁾、それでも当時はまだラテン語の複雑な構造ならびに規則が色濃く残っており、フランス語を読むためにはまずラテン語を学ぶ必要があると言われるほど難解であった。15世紀以降になると、急激にフランス語の整備、特に綴りに関する統制が始まる。その背景には、歴史的に重要ないくつかの出来事——印刷技術の発明⁽²⁾、ヴィレル・コトレの勅令⁽³⁾、アカデミー・フランセーズの創設⁽⁴⁾ 公教育におけるフランス語教育の導入⁽⁵⁾ ——などが折り重なるように起きていることが挙げられる。これらの歴史的背景を汲みながら、フランス語がどのように統制され定着していったのか、つまり現代フランス語の礎を築いていったのかを辿っていきたい。それが本稿の目的とするところである。2006年に書かれたアンドレ・シェルヴェルの著書『17世紀から20世紀までのフランス語教育の歴史——*Histoire de l'enseignement du français du XVII^e au XX^e siècle*——』を元に⁽⁶⁾、とりわけその中の「17世紀から19世紀にかけてのフランス語の綴り改革」を詳しく取り上げていきたい。それによって、それまで無秩序ともいわれていたフランス語の綴りがどのように変化していき、また大幅な改革がなされていったのか、そしてどのようにそれらが定着していったのかが浮き彫りになってくるであろう。

フランス語が確立されるまでの歴史——ガリア語から中期フランス語まで

フランス語がいつ頃どのような形で誕生したかは明確ではなく諸説あるとされているが、大まかにその誕生の歴史をまず辿ってみたい。現代フランス語の骨格を築くまでに、どのような特徴または不便性を持っていたのか、綴りに関してはどのようにして大規模な改革がされるに至ったのか、それらを知る上でフランス語という独立した言語が確立されるまでの変遷を辿ることは有意義であると思われる。

古代ヨーロッパでは、広い範囲においてケルト人のさまざまな言語が話されていたと云われている。ケルト人はもともと中央アジアで生活していた農耕民族であったが、ゲルマン民族に追われヨーロッパ北部に移動、紀元前千年から西暦元年あたりに現在のフランス北部に移住してきた。彼らはケルト語の一種であるガリア語を話しており⁽⁷⁾、フランス語の独特の響きはこのガリア語に起源を発するとも云われている⁽⁸⁾。その後紀元前2世紀頃になるとローマ人の侵入が始まり、紀元前50年頃にローマ帝国の支配下に入る。ローマ帝国の支配下では公用語はラテン語であり、ガリア人の一部のエリートたちは征服者の言語であるラテン語をつかうようになる。しかし、当時読み書きができたエリートは人口の1

パーセントにも満たず、残りの民衆はラテン語の口語である俗ラテン語をつかっていたとされている。これが後にガロ＝ロマンス語と呼ばれる言語となるものである。476年に西ローマ帝国が滅び、ゲルマンの複数の民族がガリア地方に侵入してくる⁽⁹⁾。なかでも、ドイツ北部から浸入してきたフランク族が後のフランス語の誕生にもっとも大きな影響を与えたといわれている⁽¹⁰⁾。初代国王クロヴィス1世が開いた王朝はその後300年にわたって続いた。代々国王が10世紀末までガロ＝ロマンス語とゲルマン語の2言語をつかっていたため、現代フランス語にもゲルマン語からきているものが残っている⁽¹¹⁾。ラテン語から分岐した言語のなかでもっともゲルマン的だといわれるのにはこのフランク族の影響が大きいと云われている。やがてこのフランク族の言語がfrançoysと呼ばれるようになり、後にロマンス語へと形を変えていくことになる⁽¹²⁾。

現存する最古のフランス語の文献は「ストラズブールの誓約書」であるが⁽¹³⁾、1通がロマンス語もう1通はフランシークと呼ばれるゲルマン語で書かれていた⁽¹⁴⁾。この文献が示す重要な意味は、ロマンス語がラテン語とはもはや別の独立した言語であることを示している点にある。

フランス語はこのように長い年月をかけて独自の言語としてその形を作り上げてきた。ラテン語を基軸としながらもその複雑な規則を変化させ、殊にラテン語の特徴である格体系をなくしSVO/SVCという語順を定着させ、また主格と目的格などを冠詞などで表すようになったことは顕著な変化の例であろう。14世紀を迎える頃にはフランス語としての骨格を確立させていた。政治的な力もフランス語の発展に大きな影響を及ぼしており、フィリップ4世⁽¹⁵⁾の統治に始まり封建制から中央集権国家へと国の体制が移り変わる時期でもあった。権力がパリに集中することによって、そこで話されるフランス語が急速に普及していったといわれている。そうは言っても当時のフランス語はあまりに難解で理解するためにはまずラテン語を学ばなければならないといわれたことも事実であった。

15世紀に入るとフランス語の綴り字の整備が始まる。それまでは日常生活においては話すことが主で一般の国民がフランス語を読み書きするという習慣は殆どなかったのだが、政治・商業が発達するにつれその必要性が広い層においてでてきたのである。ここで皮肉にもフランス語の再ラテン語化という一見過去に逆戻りするような現象が起こる。というのも、当時は明白な表記規則を備えていたのはラテン語のみで、しかしその古典ラテン語には23しか表記できる文字がなく⁽¹⁶⁾フランス語にはおよそ40の音(母音と子音がそれぞれ20ずつ)があった為である。更にその発音は地域や時代により異なっていた。当時フランス語の表記は発音に準じる形だったため多くの不都合が起きていたのである。そこで教養人たちが発音しない音を書き加えることで識別化を図ろうとした。例えば、vileという単語には「油」という意味も「都市」という意味もあり混乱を招くため、発音しないhを加えhvileを「油」、vileを「都市」と区別するようになったのである。これは、現代フランス語にはっきりと名残として残っている(「油」はhuile、「都市」はville)。また、ラテン語に倣って綴りを変えたものも多く、例えば「指」をあらわすdoiはラテン語のdigitusに倣いdoigtと表記されるようになり、「野原」を意味するchanもラテン語のcampusに倣いchampとなったのである。

本稿で扱う1650年から1835年までの綴り字改革は、この時代に試行錯誤により形を変え

られた綴りを法則を整え整然とした明晰なるものに統一していこうという考えのもとに為された改革なのである。

中等教育におけるラテン語の占める比重

17世紀に始まる綴り字改革の詳細をみる前に、中等教育におけるラテン語の衰退について少しだけ触れておきたい。フランスでは、他の多くのヨーロッパ諸国と同じように、あらゆる分野の根底には《古典》つまりラテン・ギリシャ文化が深く根付き影響を与えていた。しかし、17世紀頃になると、例えば言語・文学のあらゆる分野において——つまり grammaire 文法、littérature 文学、version 翻訳、thème 作文——これらすべてにおいてフランス語がラテン語を凌ぎ始める時期が到来するのである。伝統的に教えられ受け継がれてきた言語、即ちラテン語から国の言葉であるフランス語へ移行していくのである。それまでは、コレージュに限らず地方の小さな施設からパリの高等教育機関に至るまで《古典》といえばラテン・ギリシャ文学でありラテン語であった。16世紀初めにおけるフランスでの出版物の8割はラテン語で書かれたものであったとの記載も残されている。しかし17世紀半ば頃にはこの傾向が急速に変化を遂げる。ラテン語でタイトルがついた書物は僅か2割しか存在せず、17世紀末には1割にまで減少していく。このラテン語の衰退もフランス語を整え独立した明晰なひとつの言語としていこうとする動きに拍車をかけた大きなひとつの要因であるといえる。

フランス語の改革——17世紀から19世紀にかけて

17世紀から19世紀にかけて、フランス語は大きな転換期を迎えるわけであるが、それはどういった歴史的・社会的背景があったのであろうか。冒頭でいくつか述べたように、いくつかの重要なできごとが大きく関わっている。1つめに挙げられるのが、1430年代にストラスブールでグーテンベルグにより発明された活版印刷技術である。この活版印刷技術の発明により、それまでとは違い大量の印刷物を刷ることが可能となり、人々特に都市部のエリートたちの間で読書の習慣が拡がりを見せ始める。それまでは難しいラテン語によってしか知的教養が得られなかったのが書物の普及によりフランス語で知識が得られるようになったのである⁽¹⁷⁾。印刷技術の発明は、宗教との分離にも大きな役割を果たすことになった。それまでは修道院などでしか高度な知識や教養は得る機会はなく、そこでつかわれているのは高度なラテン語であった。それが、印刷技術の発明によりフランス語で書かれた本から自由に必要な知識を得られるようになったのである。これは大きな変化である。また、それまでの orthographe 綴り に対する概念は、今日のそれとは大きく異なり、あくまで判読し解読し口承するものであって、正しく文字を並べることが学ぶというものではなかった。それが、この印刷技術の発明により改革をもたらすことになる。ヨーロッパにおける読書の慣習は聖書と密接な関わりを持っており、それまでは聖書を読むには高度な知識つまりラテン語の知識が絶対であった。言い換えれば一部のエリートだけに許された特権だったのである。それが、プロテスタントの伝来により変化を遂げる。つまりそれまでのローマ・カトリック教会とは異なり聖書をラテン語ではなく自分たちのそれぞれの言語で読むようプロテスタント派は勧めたのである⁽¹⁸⁾。1550年以降はフランス語がフランスのプロテスタント教会の言語となった。以後200年間に渡ってフランス都市部のエリート

層の相当数がプロテスタントに親しむことになり、この現象によってフランス語がヨーロッパ全土に広がっていくことになる。これらの背景、つまり印刷技術の発明とプロテスタント教会による聖書の普及によりフランス語は急速な広がりを見せ始める。それに伴い、曖昧であった綴り字の統制が進むこととなる。フランス語の綴り字の標準化を押し進めたのは16世紀の印刷業者であった。王室御用達の印刷業者であり文法学者でもあったジョフロワ・トリ⁽¹⁹⁾は、1530年代にフランス語を体系化して一躍有名になる。言語を体系化するには必然的に綴りの規則が必要になり、その基底を発音におくのか語源におくのかという議論になる。詳しくは以下の章で述べるが、当時のフランス語の綴り字はかなり規則性に欠け曖昧なものであった。

1539年にはフランソワ1世がヴィレル＝コトレの勅令に署名する⁽²⁰⁾。勅令の第110条と111条には「すべての決定と行政文書の作成は母語であるフランス語によりなされなければならない」と明記されており、これ以降フランス国内の公文書はすべてフランス語で作成されるようになる。フランス語の基礎を築き広めたものとして名高い。フランソワ1世は、より高い教養を広める目的で1530年にはコレージュ・ド・フランスを設立した。ヴィレル＝コトレの勅令の10年後の1549年には、詩人のデュ・ベレーが「フランス語の擁護と顕揚」を発表する⁽²¹⁾。その後、1635年には時の宰相リシュリュー⁽²²⁾によってフランス語の純化と保護という目的で国家機関アカデミー・フランセーズが創設される。統一されていなかったフランス語の綴りや文法事項に規則的をもたせ明快な言語に浄化することが目的の組織で、辞書と文法書の編纂が重要な任務として課せられた。1694年にアカデミーによる第1版の辞書が刊行され、今日まで8版が刊行されている⁽²³⁾。マレルブ⁽²⁴⁾、ヴォジュラ⁽²⁵⁾などの改革者によって語彙・語法が整備され、近代フランス語の形が着実に確立されていった。幾多の言語の変遷と生成を経てフランス語は純化されていくのである。加えて、フランス革命後に、言語がいわゆる中央集権化する道具として重んじられ急速に普及したことは周知の事実であり先程も触れた通りである。

フランス語の綴りに関する17の改正

では、実際にはどのような変遷をフランス語は辿ったのであろうか。シェルヴェルの『17世紀から20世紀にかけてのフランス語教育の歴史—— *Histoire de l'enseignement du français du XVII^e au XX^e siècle*——』によると、1650年から1835年にかけて大幅なフランス語の綴りに関する改正が行われたことが詳細にわたって記されている。ラテン語から派生し長い年月をかけて複雑に変化を遂げながら独立した言語となっていたフランス語は厳正な規則を持たないまま拡がってきた。しかし、これまでみてきたようにフランス語が日常的に読み書きされるようになったため、この時代になってようやく綴り字などの整備がなされ規則化されていくことになるのである。リヴァロールが著書『フランス語の普遍性について』のなかで「明晰でないものはフランス語に非ず」と述べた言葉はあまりに有名であるが⁽²⁶⁾、まさにこの時代の言語改革によってフランス語は純化統制され明晰な構造を持つ言語へと変貌を遂げていったのである。現代フランス語の基礎が作られたといわれる所以である。

綴り字改革の概要

具体的に綴り字改革の概要をみていくことにする。

(1) 発音されない子音の削除

まず最初に着手されたのは、語中の発音しない子音の削除であった。この無音の子音の存在は、当時のフランス語の綴り字の最大の厄介な特徴のひとつであり重要な多くの語に関係していた現象であった。これらの無音の子音がこの17世紀半ばから始まる綴り字の整備によって大幅に削減されていくこととなる。食べられる文字と呼ばれたこれらの無音の子音は、語の末尾または語中の最終音節に数多くみられた。発音自体は現代のそれとほぼ同じであるが綴り字に発音しない子音が含まれている例として *obmettre*, *subiect*, *pointc*, *huict*, *aduis*, *adiouste*(*ajoute*), *cognoissent*, *soing*などが挙げられている。最終音節に現れる無音の *s* (*s long*) は、あらゆるポジションにみられた。単語の冒頭に現われるもの (*escrire*, *s'estonner*)、後ろから2番目の音節で無音の *e* の前に現われるもの (*estre*, *nonneste*)、語中に現われるもの (*arrester*, *empescher*)、語末に現われるもの (*qu'il fust*, *goust*, *interest*)、これらがその例である。17世紀において、この無音の *s* は現われるその場所によって異なる2つの意味を持っていた。まず単語の最初の音節で無音の *s* の後に続く場合は、語源を示すものであろうとなかろうと、[é]の音をあらわすものであった。*escrit*, *s'estonner*, *vescu*, *esleuer*, *desja*, *resiouir*がその例である。後にこれらの *s* はすべて *é* に置き換えられることになる。もうひとつの用法は、*s* が前置の母音を伸ばす標として置かれていた例である。これらの *s* は後にアクサン・スィルコンプレックスに置き換えられる。例として、*paroistre*, *coustent*, *trionphast*, *costé*, *blasmer*, *nous allasmes*などが挙げられている。フランス語の「綴り字」の難しい点は、品詞によって読みが変わるという点である。動詞の*destruire*と名詞の*destruction*は発音が異なるのである。前者は [detR^uiR] と発音し *s* は無音、後者は [d^{est}Ryksj^u] と発音し *s* は有音である。他にも、*teste* [t^{et}] と *reste* [R^{est}] はやはり同じようには発音しない。*paste* / *gaste* と *chaste* / *faste* も同様の例である。さらに複雑にしているのは、ひとつの単語が両方の可能性 (*s* を発音する場合と発音しない場合) を持ち異なる2つの単語をあらわす場合である。例えば、*monstre* という単語は、*monstre* (怪物) という意味にも *montre* (腕時計) という意味にもなるのである。同様に、*esperons* は、*espérons* (「希望する」の1人称複数・現在形) にも *éperons* (「拍車」の複数形) にもなる。

s を発音するのかもしれないのかに関する一般的な規則性を見出すことはほぼ不可能なことであり、それは多くの当時の教育者たちによって記されている。*s* が発音されない場合と発音される場合では、圧倒的に後者の方が数が多かった。その証拠に、発音を教えるためのフランス語のすべてのマニュアルには、*s* が発音される場合の単語の非常に長いリストが付けられていた。教科書を出版する際にはわざわざ同等のカタログが付いていると明示していた程であったとの記録も残っている。17世紀になると、綴り字改革によりこれらの無音の *s* がすべて削除されることになり、フランス語はそれまでの難解さを捨て明瞭化されていくことになる。

次に、語中に二重の子音を持つ例として、ギリシャ語からきている *h* と *y* が挙げられて

いる。17世紀の単語の多くのものが、現在われわれが知る単語とは異なっている。16世紀から“学識的”な綴りが急増する。sçavoir, jetter, appeller, autheur, byver, ilsなどは学ぶ上では障害にはならなかった。ギリシャ語から入ってきた単語では、yはiと同様の読みをすること、hの存在もしくは不在、それらもまったく問題を呈しなかった。ひとつだけ問題があるとすれば、phのグループとchによるディグラム⁽²⁷⁾の現象だけであった。フランス式に発音するとchose [ʃoz]だが、ギリシャ式に発音するとcholere [kɔləR]でありフランス語のcolèreと同義になってしまうという点はその例として挙げられている。

発音されない子音が削除されたこの1650年代の改革については、さまざまな教育者や文法学者が言及している。デュ・テルトル⁽²⁸⁾も次のような言葉を残している。《ceste villeはcete villeに、cognoistreはconnitreに、besoing besoinに、effectsはeffetsに、nopcesはnocesになった》。1656年にイルソンも同様にこう記している。《語頭または語中の意味のない表面上のすべてのスペルを削除することは学識のない者たちを安堵させる⁽²⁹⁾》。彼らの後継者もおおよそ同様の時代の推定を算出している⁽³⁰⁾。ダンジョー神父⁽³¹⁾は、1700年頃、およそ50年前まで一般的に使われてきたまた現在でもいくらかの人々が使っている未完成な綴り字の形を「vieille orthographe」であるところの頃名付けている。

現在我々が目にする綴りはこの時代にほぼ形ができあがったとされる。フランス語の綴りはやっこの時代に、語源であるラテン語などから背負い続けてきた付属物を下ろしたのである。ただし、幾多の網目をくぐり抜けて古い綴りのまま生き残った単語もある。その例として、acquérir, baptême, isthmeが挙げられている。また、単音節の単語に限っては例外的に無音の子音が残された。fils, corps, temps, doigtなどがその例である。その後、2世紀かけて語中の無音のsが削除されていくことになる。

(II) 複数形の規範化

名詞や形容詞の複数形に関しては、現在の規則よりはるかに複雑な知識を必要とするものであった。綴りの法則を全体で把握しておかなければならなかったのである。しかし、当時の読解を重視した教育ではこれらの規則は殆ど教えられていなかった。現代フランス語で複数形を意味する語尾の-sと-xに加え、当時は3番目の形として-zが存在していた。語尾がéで終わる名詞、形容詞、過去分詞(ex. qualité, chargé)は複数形にするときはアクサンをとった-ezが付けられていた(ex. les qualitez, precedez, trois degrez, ils sont chargez)。現在の-ésという形は存在しないわけではなかったが非常に稀なケースであった。語尾が-yで終わる名詞、形容詞、過去分詞においては、複数形を示すために-isが置かれていた(ex. amy→amis, puny→punis, le roy→les rois, le lundy→les lundis)。3つ目の規則は、例外も多いものの広く適用されていたもので、1音節以上の単語で語尾が-ant,-entで終わっている場合(ex. enfant, parent, different)複数形の語尾は-ans,-ensになるというものであった。名詞であれ形容詞であれ語末のtが脱落し-sが付けられえた(ex. enfans, parens, differens)。4つ目は、単語の最後が-au,-ou,oi(oy)で終わっている場合であるが、後に定められるような規則がまだ存在しておらず、-sをとるか-xをとるかは曖昧であり体系化されてはいなかった。最後は動詞に関する難しさである。第3グループに属する動詞は長いこと1人称現在形と不定形において-sをとらない形をとって

いた(ex. je doi (cf. tu dois, il doit), je croy, je dy, je crain, je sçay, je reçoÿ, croy, reçoÿ)。
-s が語尾につくようになるまでには時間が長いことかかり、18世紀の初めでも程遠かった。
FLEのマニュアルでも、上記の形で教えていたが、徐々に -s を加えた形(ex. je dois,
je crois, je dis) が教えられるようになる。文法家のレストー⁽³²⁾ は1730年に「-sを付ける
方がより規則に忠実で理論的である」と述べている。

(III) 3つの役割を担う e

フランス語の綴り字において、e という文字は頭を悩ませる最たるものであった。なぜなら、異なる3通りの発音——閉音の e[é], 開音の e[è], 無音の [e] ——を担っているからである。最初の2つは男性形の e, 3つ目は女性形の e と呼ばれるものである。過去には4つめの発音も存在しており、子音の n または m の前で[a]の音を担うものであったとされる。parent, tems, femme, arddemmentなどがその例である。

e の上にアクサン・テギュもしくはグラブが付くまでには少なく見積もっても1世紀半がかかったとされている。17世紀には、少なくともロベール・エチエンヌ⁽³³⁾ の時代からアクサン・テギュが無音の e と区別するため最終音節に付けられるようになった。これでaimé [ɛme] と aime[ɛmə], mangé [mãʒe] と mange [mãʒə] などの区別が為されるようになった。しかし、逆にアクサンが付くことは稀で、[é]の音はアクサンなしに -s がつくことによって表現されていた。しかしながらアクサン・テギュが付く例もあった。第1音節に付く例(elles précédent, éslévé, écrit), 語の内部に付く例(severité)などが挙げられている。無音の e が最終音節にくる語の後ろから2番目の音節ではアクサンが完全に抜け落ちている(severe, mniere, premiere, breve, donnerent, regle)。しかしここでもアクサンが付く場合と付かない場合の両方が可能であった。troisième, quatrième, siège / troisesme, quatriesmeなどがその例である。

16世紀から、フランス語の綴りの難しさは知られるようになった。17世紀末、ダンジョー神父がフランス語の音素を細かく計算した後に、問題点と解決点についてこう述べた。《フランス語には音を表現するのに短音が十分ではないのだ。フランス語には少なくとも33の短音があるが、その音をあらわすのに24の文字しかない。ラテン語をモデルに新しい形を作らなければならない》。この時代のフランス語の綴り字システムの特異性は、確かに二重の解釈がなされてしまうところであろう。

綴り字に関する具体的な17の改革

(1) u/vの区別

17世紀の半ばまで、ij, u/vの文字は区別されることなく使われていた。現代のように独立した4つの文字として完全に区別されるようになったのは1650年から1800年の間であったと推測されている。印刷技術においてこれらの僅かな違いしかない小文字の区別が徹底されるようになるまでは更にそこからおよそ1世紀半の年月が必要であった。また、これらの文字が個々のアルファベとして正式な呼称が付され定位置を得、辞書にそれぞれの4つの文字を頭として単語が整備されるまでには更に長い年月が必要であった。

Distinction des lettres *u* et *v* pour les sons [u] et [v]

	confusion <i>u/v</i>	<i>u/v</i> distingués
1650-1666	17	6
1667-1670	2	10
1671-1700	2	54

上の表が示すように、1667年までに出版された本は6つの例外があるものの（うち3つはオランダ版であった）、すべての版においてu/vの2つの文字の混同が見られた。1667年以降になるとほぼ完璧に区別がなされている。これはアルファベというよりむしろ綴りに関する問題であり、混同されて書かれた時期は長くても2, 3年で終わったようである。調査結果は、リズロット・ピーダーマン＝パックの推算とジャン＝クリストフ・ペラの結論と結びつく。つまり、現代なされているu/vの区別は1668年から1670年に終了したというものである。この改革は、フランス語の綴り字の変遷の歴史において最も重要なものであったとされる。驚くのはその定着力の速さであった。現在であれば巻き起こったであろう強い反対や抗議も起こらずに国民に受け入れられ、現在のフランス語のアルファベの改革はなされたのである。文法教育がこの新しい文字の区別によるすべての結果をひきだすにはこの後数十年かかる。

1672年以降は、文法書にも新たにjとvのアルファベが加えられることになる。それまではラテン語のアルファベを借用した23文字であったのがここで初めて25文字となる。それぞれ照応する母音の後ろ、つまりjはiの後ろvはuの後ろに配置された⁽³⁴⁾。しかし文法書の中には、新たに加えられた文字ゆえにアルファベの最後に配置するものもあった⁽³⁵⁾。jとvがその地位を確立するまでには1世紀の年月がかかったといわれている。呼び名に至っては、長い間j＝“iの子音”，v＝“uの子音”という形で呼ばれていた。独立したそれぞれのアルファベとして認識され呼称を得るまでには数十年の年月が必要でありさまざまな呼ばれ方をしていた。jは尻尾付きのiとも呼ばれていた⁽³⁶⁾。現在われわれが呼ぶような呼称を定着させたのは教育現場の小学校であり18世紀になってからのことであった。小教区の小学校の地方版には「jを [ジ], vを [ヴェ] と呼ぶ」との記述が残っている。小学校においてこれらの新しい名称は固定されたのであった⁽³⁷⁾。uの子音についてはHindretによってvéと命名された。しかし長い間ドイツ語読みのvaf, vauが好まれて使われていた⁽³⁸⁾。

(2) ü からトレマなしの u に

u と v の文字が区別されずに使われていた時代は、母音である u と子音である v を区別するための解決策として、母音の u が v と読まれないために早い時期から u にトレマが付けられるようになっていた。弁別符号を付けることによって2重母音を分けて読ませていたのである。これは分音^{ditréso}と呼ばれものである。loüanges, veüé, doüiez, lieuëなどがその例である。トレマは u または u に後続する母音(それが無音の e であるとき)に付けられ、u を母音として読ませる働きを担っていた。トレマがない場合は子音の v として発音され

るリスクに晒された。例えば、分詞の女性形である*absoluë*（現在の綴りは*absolue*）と接続法の*absolue*（現在の綴りは*absolve*）、動詞の*saluë*（現在の綴りは*salue*）と名詞の*salue*（現在の綴りは*salve*）などはこれらの説明で納得がいく。*loüanges*に関して補足すれば、*o*と*u*を独立させて発音することはなかった。現在の綴り字の発音と同じである。正確には逆の意味を表していた。トレマの付いた *u* は母音の *u* であり子音の *u* ではない。従って、*o*と融合し [ou] という音を作り出すのである。曖昧さを排除するには隣接した文字環境が助けていた。語末が*u*の語は*v*と発音されことは決してなく、というのもフランス語の単語で*v*で終わるものはひとつもないからである。*vne*という綴りも [une] としか発音されない。なぜならトレマの付いた *u*（または *u* が後に続く *e* に付いたトレマ）は、その文字を有音にさせるという役割を果たしていたからである。しかし、*u/v*を区別して書くようになってからはそれらは意味を持たなくなった。1730年には、ダンジョー⁽³⁹⁾の議論を再び持ち出し、近代主義にインスピレーションを受けたパリの教科書つまり読解をラテン語ではなくフランス語で始めたものには次のように記している。《子音の *v* と母音の *u* が区別されるようになった現在、もうトレマは必要ない》。その当時はまだ学生たちは *ü* に会う機会も多かった。トレマが消滅した例として、*louer, jouir, bouillon*などが挙げられている。

Passage du *ü* tréma au *u* sans tréma

	<i>u</i> avec tréma	<i>u</i> sans tréma
1651-1740	162	6
1641-1750	11	8
1751-1780	7	20

表が示すように、トレマが慣例的につかわれていたのは概ね1740年までで、1750年以降はその現象が逆転していく。1741年から1750年の10年間はトレマ付きとなしの比率が11対8となっており、1747年がトレマが排除される過渡期であったであろうと推測されている。*u/v*の区別がなされるようになってから実に80年後のことであった。

(3) euからûへ

手書きの文字はしばしば状況を複雑にした。点や線が疎かにされ、*u*と*n*は混同された。そのため、*vne* (*une*) が*vue*と読まれたりした。これらの間違いを避けるために、古い綴りが好まれた (*veue, veu*)。

17世紀において [u] という音は一貫して *eu* と綴られていた。動詞からの派生語 (*blesseure, casseure, rogneure*)、過去分詞 (*eu, leu, beu, creu, peu, veu, conceu*)、他の動詞 (*Il receut, qu'il peust*)、名詞や形容詞 (*fleute, meur, veuë, seur, assureur*) をみてもそれが分かる。[u]と[eu]の二重の読解のリスクを避けるために、アクサン・スィルコンプレックスの導入がなされた。段階を踏んで、(1) 前置の *e* が無音であるときはアクサン・スィルコンプレックスを付け [u] と発音させる。*reueû* (または *reveû*)、*meûr, sceû* (*sçû*) がその例である。(2) 無音の *e* が消滅する。先程の例がそれぞれ、*revû, mûr, scû*となる。

(3) かつて長母音を示す文字の上につけられていたアクサン・スィルコンフレックスが消える。*revu, su, lu, bu*がその例である。ただし、同形語がある場合は区別をするためにアクサン・スィルコンフレックスが残された。*dû, mûr, sûr*がその例である。17世紀末から18世紀末にかけて、このように e を左右に位置変えさせながら u を含む語は変化を遂げた。*veuë, →veûë →vûë →vûe →vue*がその 1 例である。

Passage du eu au û pour le son [u]

	u avec tréma	u sans tréma
1651-1685	45	4
1686-1710	14	27
1711-1730	5	35

さらに詳細な調査分析により、eu が[u]と発音される語も明らかにされた。動詞の *peu, peust* は *pû, pût* に変化した例で古い綴り方に基づいていると考えられる。2つの重要な時期があり、ひとつは e の消滅、もうひとつはアクサン・スィルコンフレックスの落脱である。*asseuré, conceu, creu* などの語にみられる eu という表記は1685年まで支配的なものであった。それが1710年以降は希薄になり、1720年以降は完全に消え去る。1686年から1710年までは2通りの綴りがなされていた。同じ書物の中に古い用法と近代的な形とが共存していた時期である。転換期は1694年頃であったと思われる。小学校は、2重母音の読みの教育を大いに単純化するこの改革を好んだ。《アクサン・スィルコンフレックスは無用の e の代わりとなるものである。これからは、*Je leux, Tu leus...* の代わりに、*Je lûs, Tu lûs...* と書く》との1691年の記載も残っている⁽⁴⁰⁾。

(4) û から u へ

前述の û の付いた単語 (*assûrer, bû, chûte, conçû, crû, eû, parû, il a plû, vûës*) は、アクサン・スィルコンフレックスの付いた形を少なくとも半世紀以上、つまり1750年頃まで保持していた。1770年以降はほぼ慣例的ではなくなり、2通りの綴り字がある時期を経て、1763年には消滅した。しかし教育現場ではそれより先にアクサン・スィルコンフレックスの無用性について説かれていた。1732年には既にレストーは以下のように述べている。《アクサン・スィルコンフレックスは、語中もしくは語末の長母音にのみに付ければよいものでその他の場合はその必要はない。アクサン・スィルコンフレックスは何らかの文字の削除があったことを記すために付けられていると思われているがそれは間違いである。この誤った認識によって、古い綴り法で *apperceû, conneu, veu, peu* と書かれていたものが *apperçû, connû, vû, pû* となってしまったのであろう》。

Passage du *eu* au *û*

	<i>û</i>	<i>u</i>
1721-1750	50	7
1751-1770	17	11
1771-1780	1	23

(5) 語末の *-y* から *-i* へ

17世紀の綴りは、16世紀の慣例を受け継ぎ単語の終わりでは *-i* の代わりに *-y* が用いられていた。しかし、18世紀の最初の数十年ですべての語末のこの *-y* は消滅する。さらに緻密な分析によると、出版業者のなかには過去分詞に *-y* の代わりに *-i* を用いその他の単語には *-y* を用いるところがあること、また別の業者は *-y* を「二重母音」の印として用いていたこと (*vray, je croy, ennuy*) が明らかになった。*-i* に戻った背景にはさまざまな理由が考えられるが、もっとも有力なのは綴りの規則性を持たせようとしたこと、複数形を作る際の規則の単純化であったと考えられる。というのも、*vray, amy, mary*の複数形はかつて*vrais, amis, maris*というふうに語末の *-y* が *-is* に変化するという煩雑なものであった。語末に *-y* が付けられていたのは1700年まではほぼ通例で、1720年までの2重の綴りの期間を経て、1721年以降はほぼ印刷上そのような習慣がほぼ完全に消え去る。1709年が転換期であったとされる。読解の教本には次のように記されている。語末に *-y* を用いるのは (1) 2つの母音に挟まれているときのみ。(2) ギリシア語でユプシロン (*y*) が用いられているときのみ (ex. *physique, lyrique*)。(3) 小辞。しかし *moi, toi, roi, loi, foi*, に関しては *-y* は用いない。アパルトマンを読み書きの遊びに変える「bureau typographique」の発明で有名なルイ・デュマは、以下のように死亡証明を突きつけた。《 *-y* は二重の *i* の代わりにしか使わない。ただし、単音節の単語、*roi, loi, quoi, ni, lui* は例外である。*roy, loy*と書く人もいるがこれらはただ単にその美しい線によって価値を付随したいがためだけに作家たちが好んで使った好ましくない慣習からきたものである》。語末の *-y* を *-i* に代えるにあたっては、教育現場の人々と飾り字の好きな人々の間でも議論が巻き起こるほどであった。例えば、*y* はしばしば曖昧さを避けるために *i* の代わりに用いられた。その例が *les yeux* である。これはもともと *les ieux* という綴りであったが当時 *les jeux* と混同されかねないということで *y* に書き換えられたのであった。

Passage du *-y* final au *-i*

	<i>-y</i>	<i>-i</i>
1651-1700	80	10
1701-1720	18	25
1721-1740	6	32

(6) 複数形が *-ez* から *és* へ

17世紀から18世紀初めにかけて、*-é* で終わる単語の複数形が *-ez* になることは既にみた

通りである。しかし、この規則に従うといくつかの過去分詞が現在形の複数形と同形になってしまうという問題が起こった。*chargez* (過去分詞) / *Vous chargez* (動詞の現在形), *separez* (過去分詞) / *Vous separez* (動詞の現在形) がその例である。同じ時期、少数ではあったがどちらもつまり過去分詞も現在形も *és* と書く場合もあり混乱を極めた。そこで、過去分詞と複数形を明白に区別するため、規則の統制が行われた。文法学者、教育現場に立つ教師、公的機関で働く者たちが一丸となり、伝統的に使われていた *-ez* に異議を申し立てたのだ。文法学者、教育者などが伝統的な語尾 *-ez* に異論を唱えた。抒情詩人でありパリの小学校の会長であったクロード・ジョリもそのひとりであった。改革が終わりに達しようとしていた50年後、ロラン⁽⁴¹⁾ はこのように述べている。《名詞の複数形は単数形に *-s* をつけるのが一般的な規則である。*pomme* (単数形) / *pommes* (複数形), *fleur/fleurs* のように。なぜ *-é* で終わる名詞と過去分詞を例外にする必要があるのか。これでは2人称複数の現在形 *aimez* と過去分詞が同形になってしまう。2つをきちんと規則で分ける必要がある》。これらは、現場の教師の強い声が届き改革された。1735年が転換期であった。

(7) *je croi (croy)* から *je crois* へ

Je crois (croy) のように、語末に *-s* が付かない短い形は、1720年以降急速に消えていく。1710年までは支配的な形であったのだが、1718年頃から語尾に *-s* が付く形へと変わっていく。

Passage de *je croi* à *je crois*

	<i>je croi (croy)</i>	<i>je crois</i>
1651-1710	42	18
1711-1720	6	3
1721-1750	4	14

(8) *je sçai (sçai, sai)* から *je sçais (sais)* へ

Passage *je sçai (sçay sai)* à *je sçais (sais)*

	<i>je sçaci (sçay sai)</i>	<i>je sçais (sais)</i>
1651-1730	83	11
1731-1750	8	10
1751-1780	3	15

je sais の最後に *-s* が付かない *je sai* という形は1730年まで一般的な規則であった。1731年から1750年の間は両方の綴りが使われていて、1740年が転換期であった。1750年以降は *-s* が付く形が一般化する。*je sçay* は *je coris* のおよそ20年後に定着する。同様の変化がほかの動詞にも起きる (*je voi, je vai*)。第3グループに属する動詞のなかで *je sai/je sais* は *-s* を付けない古い用法がもっとも長く使われた例である。

(9) アクサン・テギュ

17世紀、最終音節の[é]の音はつねにアクサン・テギュで示されていた。単語の最初の音節 (genie, eloquenece, reussir), または語中 (agreable consideré, secretaire), もしくはその両方 (ceremonie, beresie, precisement) においては e はアクサンなしが一般的であった。これらの位置にアクサンがつかないのには少なくとも2つの理由が考えられた。1つは, i のところで言及した理由と同じで区別符号に対する嫌悪によるもの。2つめは, e が単語の冒頭にくるとき (edit, element, ecriture, esriture, etenne) 女性形を示す e (または無音の e) には絶対に付くことはないというもの。しかし, またしてもここで読解の大きな問題が起こる。つまり, 品詞がわかっていないと発音の区別をすることができないのである。1730年以前においては, 単語の最初または内部の音節においてアクサン・テギュが置かれることはあまりなく例外であった。1741年以降になると, それが語中のどの位置においてもおかれるようになる。1736年が転換期であったと推測される。複数形の語尾に -és が置かれるようになったのと同時期であったのは偶然ではないであろう。

Installation de l'accent aigu en syllabe initial et intérieure

	<i>pas d'accent</i>	<i>accent</i>
1651-1730	137	8
1731-1740	7	7
1741-1760	5	38

(10) après auprèsに関するアクサン・テギュの定着

最初はアクサンは付いておらず, après auprèsと綴っていた。いくつかの前置詞, 副詞がアクサンをとるようになったのが17世紀の中頃であった。après auprès dèsがその例である。1666年から1670年まではふたつの綴り法が混在していた。1668年頃からアクサンをつける傾向へと変わっていく。

Installation de l'accent aigu sur les préposition après auprès, etc.

	après	après
1651-1665	9	3
1666-1670	3	7
1671-1690	4	21

(11) アクサン・テギュからアクサン・グラヴに

(10) で取り上げた前置詞—副詞のグループの他に, 語尾が -ez で終わり[è]と発音するものに, 男性名詞のグループが加わる。accez, ciprez, progrez, sucezなどがその例として挙げられている。しかしこの場合でも語尾が -es で終わるという例も珍しくはなかった。1670年以降になると, aprèsといったタイプの前置詞やsucez (succes) といった名詞はすべて非常に開いた[è]と発音されるようになり, アクサン・テギュが付されるようになる (après, prés, progrès, succès)。この場合のアクサン・テギュは, 女性形ではないという意

味を表すものであった。しかし、発音上の問題があり、というのも普通はアクサン・テギュの付いた e は非常に閉まった音を表すものであったからである。この問題を解決するために、1711年以降からはアクサン・テギュに代わってアクサン・グラヴが付けられるようになる。1720年以降はアクサン・テギュはほぼ消えていく。è が新しくフランス語のアルファベに加わることになるのだが、ラテン語ですでにつかわれていたので (è, propè, maximè, paenè, sanè, sinè) 印刷技術面でも問題は生じなかった。

Installation de l'accent grave dans les séries après, auprès, et progrès, succès

	après, succès	après, succès
1651-1710	67	6
1711-1720	7	10
1721-1750	6	47

(12) 最終第 2 音節における無音の e の前に付くアクサン・グラヴの定着

最終第 2 音節において、無強勢の e を後ろに持ち軽く開いた è と発音する音を含む語は非常に多く存在していた。matière, père, pièce, règle, règne remède, siècle, troisième, それから ils allèrent などの動詞がその例である。しかし、1740年まで殆どの作品においてアクサンが付けられることはなかった。1730年から1740年にかけて traités, cérémonie のようにアクサン・テギュが付されるようになった傾向を受けて、père, caractère, manière などの単語にもアクサン・テギュが付くようになる。しかし、これは読解において矛盾と混乱を生み出すようになる。従って (10) でみた après, succès といったアクサンの変遷と同じ道をとるようになる。1715年からアクサン・グラヴが使われ始め、長い年月をかけて定着していくことになった。アクサン・クラーヴとアクサン・テギュの両方の綴りが共存していたのが1780年から90年にかけてであり、1790年以降はアクサン・グラヴに統一されていく。19世紀の初めまで、アクサン・グラヴは任意であった。

Installation de l'accent grave dans les syllabe préfiniales avant un e muet

	pere	père
1651-1780	197	15
1781-1790	14	11
1791-1800	10	33

(13) appeller, jetter から appeler, jeter へ

アンシアン・レジームの元では、発音は今と同じであるが、それぞれ appeller, jetter と書かれていた。無音の [e] が 2 重子音の前にくるのは一般的な規則に反するものであったが、それでも1790年頃まではこの形が定着していた。発音を基に正しい綴り字を整備していくとする文法家たちによって、1790年以降現在のような綴り (appeler, appelons) に訂正されていく。アカデミーフランセーズの辞書には遅れて1740年以降からこの形が掲載されるようになる。1800年頃までは新旧両方の綴り字がつかわれていたが、19世紀初めに

は古い綴りは完全に消滅する。

Passage des formes appeller, jeter à appeler, jeter

	appeller	apeler
1651-1790	211	13
1791-1800	21	17

(14) 発音されない s がアクサン・スィルコンプレックスに

語中の発音されない s の問題は、もっともデリケートな問題のひとつであったことは既にみた通りである。不定形の *estre(être)* と同動詞の他の活用形 (*vous estes, j'estois*) は1690年までつかわれていたとみられている。発音しない s が脱落し代わりにアクサン・スィルコンプレックスが付される形へと移行していくのだが、1705年までは古い綴りと両方使われており、1730年頃には新しい綴りがほぼ定着する。être に関して言えば、1696年が定着したおおよその時期で、最後に古い綴り (*estre*) がみられたのは1727年のことであった。*Il est* は昔の綴りが生き残っている唯一の例である。

Passage du s non prononcé à accent circonflexe

	estre	être(être)
1650-1690	50	10
1691-1705	12	23
1706-1730	8	51

(15) -oi から -ai へ (Français)

綴り字改革で、政治的な背景を背負ったものがみられるのはこの例だけである。つまり、アンシアン・レジームの下で、旧体制支持者は -oi、改革派は -ai をつかっていたとされる。ヴォージュラ⁽⁴²⁾によれば、民族系の名詞と形容詞と町の名前から派生した地方を表す名詞はかつては -oi と綴られていた。例として、*François, Anglois, Hollandois, l'Orléanois, le Nivernois, le Bourbonnois* などが挙げられている。-oi の綴りが支配的だったのは1790年頃までだとされ、フランス革命後は -ai の綴りが主流となっていく。つまり、現代の綴りと同じように *Français, Anglais...* と変わっていったのである。しかし、そうはいっても -oi の形は1820年頃までは根強く残り、19世紀の初め頃までは *grammaire française* と記すものが94あったのに対し、33の書物はまだ *françoise* と綴っていた。その古い綴りも1930年以降はほぼ姿を消すことになる。

Passage des formes en -oi- aux formes en -ai- (type français)

	françois	français
1750-1789	55	3
1790-1800	12	27
1801-1820	34	94
1821-1834	9	151

(16) oiから ai へ (*J'étois*)

半過去 (*étois*), 条件法 (*serois*), その他の動詞 (*connoître, paroître, foible*) につかわれていた -oi は, (15) でみたグループより遅れて1795年以降に衰退していく。1817年を境に -ai の綴りが取って替わることになる。表が記すように1821年以降は -oi の綴りは殆どみられなくなる。

Passage des formes en -oi aux formes en -ai(type *j'étois*)

	J'étois	J'étais
1790-1810	69	44
1811-1817	22	18
1818-1820	2	9
1821-1834	15	147

(17) ans/ensから ants/entsへ

(15)(16) でみてきた -ai とは異なり, *les enfants, les parents*にみられるように-antsと-entsは規則的な複数形の形であり少なくとも17世紀からみられる綴りである。しかし, 短縮形の-ans/-ensの方が主流であり, 1770年代からは少しずつ使われるようにはなるものフランス革命時分にもほぼ浸透せずにはいた。短縮形はその後も優位で, 1820年までは特に支配的であった。下の表でも分かるように1834年にはほぼ同等となり, 綴り字に関する眼に見張るような教育と1835年に出版されたアカデミー・フランセーズ第6版の辞書の影響で, 短縮形のans/ensの綴りはやがて完全に姿を消すこととなる。これは, アカデミー・フランセーズの辞書が綴り字の改革に貢献した唯一の例であるとされている。発音しない子音は削除した方が好ましいという改革者たちの意見に従い最終的に*enfants, parens*という現在の綴りになる。

	enfants	enfants
1791-1820	102	43
1821-1830	45	47
1831-1834	24	29

学校におけるフランス語教育の普及

フランス語が広く急速に普及していった背景には, 公教育との密接な関わりがある。フランス語がいわゆる国語として教育機関で教育されるようになったのは, フランス革命以降のことであり実は歴史はそう古くない。フランス革命以前の旧政体^{アンシャン・レジーム}の元では, フランス語という科目は存在せず, 学校ではラテン語教育が当たり前であった。しかし, フランス語教育の必要性を問う議論がなされるようになり, フェルディナン・ブリュノ⁽⁴³⁾によれば, 詩人のジャン・ゴダールがフランス語教育を組織化しようとした最初の人物であった。フランス語がまだ教育の対象となっていないこの時代に「芸術的要素を持つフランス

語という言葉は、ギリシャ語やラテン語と同じように公教育の場で教員によって教えられるべきものである」と述べている。ゴダールは、フランス語教育のために文法書が必要だと主張した。同時にそれを教える教員と教育をする場所である学校が必要であると説いた。しかし、ギリシャ語とラテン語に倣う形で無理にその狭い枠組みにフランス語をはめこもうとし、またフランス語教育とは言語教育であると考え文学に関していささかも考慮がないなどの問題もあった。

フェルディナン・ブリュノの『フランス語の歴史』を紐解くと、17世紀の前半から「フランス語教育」に対する要求は常にあったことが記されている。教養あるエリートの育成にはラテン語が独占的地位を築いており、反発が拡まってもいたのである。リシュリユールのアカデミーの創設がその1例である。では、フランス語を独立した科目として教えることは可能であるのか。古典教育において中核をなすのはギリシャ・ローマの古典の文学と言語であり、フランス語はラテン語に付加されるだけのものであった。フランス語文法はラテン語文法の型に流し込まれ、フランス人の作家もギリシャラテン作家の翻訳もしくは模写するというものであった。フランス語での作文はラテン語の作文を模倣したものに過ぎなかった。古典言語から国語としてのフランス語に移行するのはレトリックの授業であったと云われている。それまでは、ティット・リブの演説、ラテン語で書いたディスクールを模写する他に方法がないと考えられていた。このフランス語とラテン語の共生があまりに根強く、フランス人によってフランス語は純粋に教えらるべきものであろうかという議論が沸くのである。フランス語の教育は「役に立つ」ということが最も優先されるべき基本観点であった。古典教育の枠に持つていくには時間が短すぎた。フランス語はつねにラテン語でラテン語の枠でラテン語のモデルに添って教えられてきた。フランス語をフランス語で教えることは不可能であろうか？フランス語の作文を、ラテン語のレトリック、韻文、語りを抜きにして教えることはテクニク的に無理であろうか？19世紀半ばまでそれらは大きな障害であった。ラテン語なしの中等教育、古典教育抜きの教育に意味があるのだろうか？何世紀にも渡ってそれらの疑問は繰り返され、ラテン語を基軸にした教育がなされてきたのであった。

フランス語教育の長い議論の後に、ボナパルト主義の全フランス教員団が設立され、時代がまた逆戻りしてしまう。しかし1750年以降、フランス語教育を中等教育でという主張が通る。フランス革命がなかったように、ラテン語の詩、ラテン語のディスクールが再び中核をなすようになり、フランス語の試験はなくなる。1808年の3月17日の法令によってすべての公立の中等教育は「Université」に委託される。保守派のヴィユマン首相が言った「フランスの中等教育でフランス語を教えるなど絶対ない」はあまりに有名である。

1790年の8月、国民議会は世界初の言語調査の実施を、人望の高かった革命派聖職者のアンリ・グレゴワール神父に命じた。国民の話す言語の調査をし、4年間で調査結果をまとめ報告書を提出した。1880年以降フランス語教育の設立は、その後輝かしい未来を辿る「culture générale」という新しい概念を生んだことによって象徴的に刻まれる。Culture traditionnelleと対をなす表現である。19世紀まで、読み書きを同時に子どもに教えることは非常に稀なことであったがこの時代にやっと中等教育にフランス語が導入されることとなったのである。

外国語または外国語としてのフランス語

最後に、外国語としてのフランス語教育にも触れておこう。もともとフランス語教育は、外国語としてフランス人以外の外国人（一般的に若者から大人）に向けられたものであった。フランス語の文法書が初めて作られたのはイギリスであったことは周知の事実であるが、フランス人のためにフランス語の文法書を編纂するなどという考えはばかげたものであると17世紀末まで言われていた。文法というものは、外国語を習得する際に必要なものであって、それはラテン語をさしていた。当時は、文法イコール基礎ラテン語という考えであった。

確かに、16世紀にもフランス語の文法書というものはあった⁽⁴⁴⁾。しかし17世紀になっても、アルノーとランスロの『一搬体系文法』⁽⁴⁵⁾まで、教育史に跡をのこしたマニュエルはすべて対象者は外国人であった。フランス人のために書かれた文法書の数は、近隣諸国にむけて書かれたそれと比べ物にならない。16世紀から17世紀にかけてのフランス語文法書は、英語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、イタリア語、スペイン語、そしてとりわけラテン語で書かれたものであった。殆どの場合が、見開きもしくは1ページを2つに区切った形で、片側をフランス語片側を別の言語という形式を取っていた。当時、もっとも大事にされていたことは、発音の習得、オーラル表現であって、それらが教える側にもっとも求められるものであった。綴り字は従って二の次の問題であったのである。

結論

長い間ラテン語の影響を色濃く残していたフランス古語は、時間をかけてやがて独自の特徴を備えた言語へと姿を変えてきた。さまざまな歴史的・社会的背景を背に、ある種の着脱を繰り返しながらより明晰な規則を持つ言語として生まれ変わろうとしてきたのである。1539年にはヴィレル＝コトレの勅令によりフランス語が唯一の国の公的言語とされ、また印刷技術の発明によりそれまで多くは口頭で伝承されていた曖昧さを多く含むフランス語が活字として広く世に広まるようになった。印刷業者により文字の区別が明確になされるようになり更にはそれが綴り字の統一へと大きくつながっていったのである。それまで曖昧で混乱を生じさせるような不確定の綴り方はこの時代に退廃の一途を辿り、16世紀以降はフランス語の規範を整え統一していこうとする動きが顕著になっていったのであった。フランス語の純化と保護を目的とした国家機関であるアカデミー・フランセーズが創設されたのもこの時代であった。本稿で取り上げた1650年から1835年にかけて行われた17の綴り字に関する改革は、それまでラテン語の語源に忠実であろうと残していた発音されない無音の子音や混乱を招く綴り字を大幅に改善しフランス語の規則を統一し明瞭化したものであり、近代フランス語の綴りの基礎を築いたという点において大きな意味を持つであろう。

脚注

- (1) 11世紀から13世紀にかけてつかわれていた古期フランス語 (l'ancien français) はまだラテン語の口語体である俗ラテン語 (latin vulgaire) の影響を強く残したものであったが、14世紀から16世紀にかけてつかわれていた中期フランス語 (moyen français) はいわゆる近代フランス語 (le français moderne) の基礎を固めていった過渡期とされるものである。
- (2) 1430年代にストラースブルにてヨハネス・グーテンベルグによって活版印刷術が発明される。この印刷技術により、急速にフランス都市部の特にエリート層に読書の習慣が広がっていく。
- (3) 行政ならびに法律に関する公文書をそれまでのラテン語からすべて標準フランス語で書くよう定めたもの。1539年にフランソワ1世によって出された勅令である。フランス語が初めて公用語としてその地位を認められた点で非常におおきな意味を持つ。
- (4) フランス語の浄化・保護を目的として1626年に設立された国家機関。フランス語をひとつの明確な言語として純化するための重要な役割を担い、フランス語の語彙・用法などの統制に尽力。文法書・辞書の編纂がその最たる任務であり、現在アカデミーフランセーズが編纂した辞書は第8版を数える。文法書は1935年に出版されている。
- (5) フランス革命翌年の1790年にフランス国内で話されているさまざまな言葉について大規模な言語調査が行われた。国民議会の依頼を受けたアンリ・グレゴワール神父が4年に渡って調査しまとめた報告によると、フランス語がきちんと話せたのは国民の僅か1割に過ぎず、地域語や他のさまざまな言語が入り混じって使われている現状が明らかとなった。この報告を受け国民議会は「フランス国内でつかう共通の言語をフランス語とする」ことを決め、フランスの子どもたちが読み書きを学ぶことができるよう「国民は無償で公教育を受けることができる」ことを憲法第1条に盛り込んだ (1791年)。
- (6) 本著は2007年にアカデミー・フランセーズから贈られる名誉あるギゾー賞を受賞している。
- (7) 後にやってきたローマ人が付けた呼称。ケルト人が住んでいた一帯をローマ人はガリア (Gaulois) と呼んでいた。
- (8) ガリア語は現代フランス語にも僅かではあるがその語彙を残している。殆どが農耕に関するもので100語前後。bureau, charrure, mouton, sapin, lotteなどがその例である。
- (9) ヴァンダル族、ゴート族、サクソン族、ヴァイキング族などがその例で、それぞれの民族が自分たちの言語にガロ=ロマンス語を取り入れる形で新たな地域語を誕生させていった。
- (10) フランク族は現在のパリにあたるリュテス (Lutèce) に王国を築いた。それがフランク王国である。
- (11) gant, fauteuil, robe, champion, guerreなどがその例である。現代のフランス語の10パーセント程度にその名残があるとされている。
- (12) 1265年には現代の意味でのフランス語francoysが話されていたことが分かっている。
- (13) 842年に西フランク王国と東フランク王国の国王の間で交わされた盟約。初代西フランク王シャルル2世と初代東フランク王ルートヴィヒ2世の間で交わされたもので、西ローマ皇帝である長兄ロタール1世に対抗し同盟を組むことを約束したものである。3人ともゲルマン民族を統合し西欧を統一したフランク王国シャルルマーニュ (在位742-814年) の孫にあたる。
- (14) ただし、現存する誓約書は1世紀後に原本から書き写した複製であり、ロマンス語で書かれた文書がどのようなものであったか確かなところはわかっていない。尚、それより少し前の813年の記録として、トゥールの公会議で聖職者はロマンス語で説教するよう奨励されたとの記載が遺っている。これは教会の人々がラテン語ではなくロマンス語を話していたことを証明する最古のものだとされている。
- (15) フィリップ4世(1268年-1314年)。在位期間1285年-1314年。絶対王政を想起させる政治体制をつくったフランス国王。
- (16) ラテン語には u, v, w の文字が存在しなかった。
- (17) 1501年にフランスで出版された本のうちフランス語で書かれたものは全体の1割に過ぎなかったのが、1575年にはほぼ半分になったとの記載が残っている。
- (18) これにより1530年と1541年に聖書はフランス語に訳されている。この時期には、プロテスタントの神学者カルヴァンは宗教論文をフランス語で発表し、ルターの著書もフランス語に訳されるなどしている。

- (19) Geoffroy Tory(1480-1533)。セディーユ、アポストロフ、アクサン記号などを導入したフランス語改革者の1人。
- (20) 1539年8月にフランソワ1世(フランス国王(1494年—1547年)。在位期間は1515年—1547年。)によって署名がなされた。これにより、すべての正式な文書はすべてラテン語ではなくフランス語で書かれることになった。
- (21) 《Défense et Illustration de la langue française》。デュ・ベレーは、フランス語をより高尚な分野つまりラテン語に占有されていた政治や医学、大学や詩といった分野にまで広めていこうとした作家集団プレイヤード (la Pléiade) のひとりであった。プレイヤードの指導者は詩人のロンサル。
- (22) Richelieu(1585-1642)。フランスの政治家。ルイ13世の宰相でフランスの絶対王政に尽力した人物。国家機関であるアカデミー・フランセーズを創設させたことで有名である。
- (23) 1694年の初版刊行以来、1718、1740、1762、1798、1835、1878、1932—35、1992と刊行されている。文法書は1935年に第1版が発行された。
- (24) François de Malherbe (1555-1628)。フランスの詩人、批評家。古典主義を提唱した人物。
- (25) Claude Favre Vaugelas (1585-1650)。フランスの文法家。著書『フランス語に関する覚書』はフランス語規範文法の基礎を築いたといわれている。
- (26) 1784年に記された言葉——Ce qui n'est pas claire n'est pas le français.
- (27) 二重字 (digramme)。2つの文字でひとつの音をあらわすもの。
- (28) Du Tertre, 1651年。
- (29) Irson (Claude), 著書 《Nouvelle méthode facilement les principes et la pureté de la langue française》の中で。
- (30) 《この20年から30年の間にフランス語の綴りというものは日々変貌を遂げてきた。》Lartigaut(Antoine), Les progrès de la véritable orthographe, 1669。
- (31) 《Sur l'orthographe française》, Louis de Courcillon(1643-1723)。文法学者であり、フランス語の鼻母音についてはじめて描写した人物として知られている。
- (32) Pierre RESTAUT(1696-1764)。フランスの文法家。法廷弁護士を経て、1930年にフランスで初めてのフランス語のためのマニュアル《Principes généraux et raisonnés de la Grammaire française》を刊行した。
- (33) Robert Estienne(1503-1559)。パリの出版業界で重要な地位にあったエチエンヌ家の1人。聖書を初めて章と節に分けて出版した人物である。
- (34) La Grammaire française donnant l'intelligence de cette langue, Paris, 1672
- (35) Le methode de la langue française, Lille, 1674
- (36) 文法家によって呼称はさまざまで、Hindré(1687)はjaと呼び、Mauger(1705)とCournault(1771)はjé, 《Essai d'une école chrétienne》(1730)ではji, Moules神父(1761)と《Traité de la prononciation et de l'orthographe》(1775)ではje, Gabriel Girard神父(1716)はドイツ読みでyodと呼んでいた。
- (37) 《Méthode familière pour apprendre l'orthographe française la plus commune, dressée pour les enfants et les autres personnes qui n'apprennent point le latin》, Toul, 1708
- (38) Girard(1716), Provansal(1720), Trotet(1775)。またScipion Roux(1694)やToul(1775)はveと呼んでいた。
- (39) Dangeau(1638-1720)。回想録者。宮廷臣として国王に仕え「ルイ14世の宮廷記録」を残している。
- (40) Meauxの司教区の寄宿学校。
- (41) Charles Roland(1661-1741)。フランスの教育家、作家。数々の教育改革に従事した人物。
- (42) Vaugelas(1585-1650)。フランスの文法学者。アカデミーの辞書の編纂を指導し、『フランス語に関する覚書』は近代フランス語規範文法の源流となっている。
- (43) Ferdinand Bruno(1860-1938)。フランスの文法学者。「フランス語史」の著者。
- (44) Meigert, Robert Estienne, Ramusなどがそれぞれ執筆している。
- (45) Arnaud et Lancelot, 《Grammaire générale et raisonnée》, 1660

Bibliographie

【日本語文献】

- 1 アルベール・ドーザ, 松原秀治, 横山紀伊子訳, 『フランス言語地理学』, 東京大学書林, 1958年
- 2 アンリ・ジオルダン, 原聖訳, 『虐げられた言語の復権』, 批評社, 1987年
- 3 ジャン＝ブノワ・ナドー, ジュリー・バーロウ, 立花秀裕監修, 中尾ゆかり訳, 『フランス語の話——もうひとつの国際共通語』, 大修館書店, 2008年
- 4 ピーター・リカード, 伊藤忠雄, 高橋秀雄訳, 『フランス語史を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1995年
- 5 ベルナル・セルキリーニ, 瀬戸直彦, 三宅徳嘉訳, 『フランス語の誕生』, 白水社, 1994年
- 6 鈴木豊, 久富健, 『フランス文法小事典』, 朝日出版, 1995年
- 7 丸山圭三郎, 『フランス語とフランス人』, 日本放送出版協会, 1984年
- 8 家島光一郎, 川村克己, 田島宏共著, 『le français, comment s'est-il fait? 現代フランス語ができるまで——フランス語小史——』, 白水社, 1971年

【フランス語文献】

- 1 Chervel (André), *Histoire de l'enseignement du français du XVII^e au XX^e siècle*, Editions RETZ, 2006
- 2 RIGEL(Martin), PELLAT (Jean-Christophe) , RIOUL(René), *Grammaire méthodique du français*, PUF, Vendôme, 1999

Dix-sept réformes de l'orthographe française de 1650 à 1835

Megumi Nihei

Sommaire

Dix-sept réformes de l'orthographe française ont été procédées entre 1650 et 1835. Cette rénovation orthographique a purifié la langue française de l'époque des débris du latin. Grâce à elle, les bases du français moderne ont été batis par degrés. A travers des divers événements importants, comme l'ordonnance de Villers-Cotterêts, l'invention de l'impression typographique, la fondation de l'Académie française et l'enseignement public à titre gratuit, la langue française s'est répandue graduellement dans toutes les couches sociales de la France comme une seule langue commune et officielle. Notre but dans cet article est parcourir cette évolution et montrer comment l'orthographe française a été modernisée.